

タイ国中等教育機関の日本語選択コース用 ひらがな教材開発報告

プラパー セントーンスック・三浦多佳史・渋谷実希

〔キーワード〕 中等教育段階、日本語選択コース、ひらがな教材、アソシエーション法

〔要 旨〕

タイ国では西暦2001年の基礎教育カリキュラム改訂で、全国共通で決められていたカリキュラムを、各中等学校が地域や学習者のニーズに合わせて自由に設定できるようになった。これに伴い、選択コースや時間外の活動として、週1、2回の日本語クラスを開講する学校が大幅に増えたが、少ない時間で学ぶ学習者用の適当な教材が見当たらないことが問題となっていた。

国際交流基金バンコク日本文化センターでは、これらのニーズに応えるためタイの中等学校日本語選択コース向けの教材開発に着手した。国内4地方における事前調査を経て、2011年3月に「こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い」が出版され、シリーズ2冊目の「こはるといっしょに にほんごわぁ〜い」も出版に向けて準備が進められている。本稿ではその事前調査結果と「こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い」の開発過程を報告する。

1. はじめに

国際交流基金が3年ごとに実施している「日本語教育機関調査・2009年」^①によると、タイの初等中等教育段階の学習者は、1998年の調査と比較して6倍近くに増加し、43,934人となっている。このうち、中等教育機関では、大きく分けて以下の3つの形態で日本語教育が行われている。

- ①第2外国語専攻コース：第2外国語として日本語を必修で学ぶ。週6コマ程度で開講。
- ②日本語選択コース（以下選択コース）：選択科目のひとつとして開講。週2コマ程度実施している学校が多い。
- ③活動：「活動」は正規の科目ではないが必修である。1週間に1コマ開講している学校が多い。

タイ国では、西暦2001年の基礎教育カリキュラム改訂に伴い、それまで全国共通で決められていたカリキュラムを、各学校が地域や学習者のニーズに合わせて自由に設定できるようになった。その結果、上記②の日本語の選択コースを開講する学校が増えたが、授業時間数の少ない選択コースに合った適切な教材が不足しているという問題点も浮かび上がってきた。

タイの中等教育で使われている教材は、国際交流基金バンコク日本文化センター（以下JFBKK）が2004年に開発した初級用日本語教材『あきこと友だち』（以下『あきこ』）が多くの

機関で使われている。しかしながら、『あきこ』はもともと①の形態で使用されることを念頭に開発されたものであるため、②、③の場合では、3年間で半分程度までしか進めない。また、②、③の場合は1週間に1、2回程度の授業しかないため、学習項目が定着しにくく、最初のひらがなの定着で躓く学習者も多い。『あきこ』をこういった形態の講座で使うにはどうしたらよいかといった悩みを抱える教師も多いと聞く。つまり『あきこ』は全6巻、30課構成の文法積み上げ式の教科書なので、それをそのまま②、③の形態で使用するのはかなり無理があるといわざるを得ない。

以上の状況を踏まえ、JFBKKではタイ中等教育機関日本語選択コース向けの新しい教材の開発を検討することとなった。本稿は、その開発過程を報告するものである。

2. 開発にあたっての調査

開発にあたって、タイ北部、中部、東北部、南部の4地方において事前調査を実施した⁽²⁾。

教員への聞きとり調査は、上記4地方で日本語の選択コースを開講している標準的な21校の学校を選び、それらの学校で教えている計27名に対して行った。調査した21校のうち中等部・高等部⁽³⁾の両方に日本語選択コースがある学校は2校、中等部のみが12校、高等部のみが7校であった。教員への聞き取り項目は以下の5つである。

- (1) 選択コースの学習目標
- (2) 選択コースの学習期間
- (3) 選択コースの使用教材
- (4) 選択コースの問題点
- (5) 新しい教材に求めるもの

また、学習者へのアンケート調査は、4地方12校で選択科目の日本語講座を受講している学習者、計542名に対し、以下の4項目による質問調査を行った。

- (1) 日本語の文字を学習しているかどうか
- (2) 日本語の文字の学習が好きかどうか
- (3) 今勉強しているコースで一番好きなこと
- (4) 今後このコースでどのような勉強がしたいか

以下、簡単に結果を報告する。

2.1 教員への聞き取り調査結果

2.1.1 選択コースの学習目標

仏暦2551年(西暦2008年)の基礎教育カリキュラムでは、外国語学習の目標が以下のように定められている。「学習者が、外国語に対して前向きな態度を持つこと、外国語を使えるよう

になること、いろいろな場面でコミュニケーションができること、知識を探求すること、仕事をする、進学することを目標とする。さらに、世界の様々な事情や文化を知り理解し、創造的に世界に考えや文化を伝えることができることも目標とする」。(4)

一方で、実際に日本語を担当している教員からの聞き取り調査では、「日常生活の中で簡単に日本語を話す、聞く、読む、書くことができ、日本事情や文化に対して関心を持つ」という具体的な目標を掲げている教員が多かった。

2.1.2 選択コースの学習期間

	1年間	2年間	3年間
中等部	4校	3校	7校
高等部	2校	2校	5校

表－1 日本語選択コースの学習期間

3年間続けて学習する機関がもっとも多いが、1年間のみ、あるいは2年間で学習を終える学校も少なくない。

2.1.3 選択コースの使用教材

一番多かったのは『あきこ』で8校が使用していた。そのほかでは『みんなの日本語初級』（スリーエーネットワーク）、『たのしいこどものほんご』（凡人社）を使っている学校があった。また8校が自作のプリントやいろいろな教科書から集めてきたプリントを使っている。

「1.はじめに」でも述べたように『あきこ』は、全6巻30課からなる積み上げ式の教科書で、週1～2コマ程度の選択科目の日本語講座には、必ずしも適した教科書とは言いがたい。同じく文型積み上げ式教科書『みんなの日本語初級』を使っている学校と合わせると、今回調査した21校のうち半数近くの学校でこうしたタイプの教科書が使われていることになる。ほかの学校でもさまざまなテキストから必要な部分のみをとってきたり、教員自身がプリントを作ったり、いろいろ工夫しているようであるが、適当なテキストが不足しているのは間違いないと考えられる。

2.1.4 選択コースでの問題点

本調査結果から、教師が感じている選択コースの問題点は以下のように（1）学習者の問題点、（2）教師の問題点、（3）教材の問題点、（4）学校の制度や設備の問題点の4つに分けられる。

（1）学習者の問題点

- ① 文字がなかなか覚えられない。(10人)
- ② 授業が週に1回だけなので、既習項目が定着せず、すぐに忘れる。(2人)
- ③ 学生がついてこれられないので、計画通りに進められない。
- ④ 勉強があまりできない学生が多い。
- ⑤ 他の科目の宿題も多いから、日本語の宿題はあまりやってきてくれない。

(2) 教師の問題点

- ① 何を教えればいいのか分からない。(5人)
- ② 授業のほかに別の仕事がたくさんあるから、授業の準備をする時間が足りない。
- ③ 『あきこ』にはない日本文化も紹介したいが、準備する時間があまりないので、結局それを紹介することができない。
- ④ 教師は自分の発音に自信がない。
- ⑤ 文化を紹介するのが苦手だ。

(3) 教材の問題点

- ① 『あきこ』は選択科目の学生にとって難しすぎて教えるにくい。(7人)
- ② 中学生に合った教科書がない。(5人)
- ③ 学生は日本文化・日本事情に興味があるが、教科書にはそれがない。(2人)
- ④ 学習内容に合う映像教材がない。

(4) 学校の制度や設備の問題点

- ① コースの名前は選択科目だが、実際は必修科目になっており、日本語に興味がない学生もたくさん入る。だから教えるにくい。(2人)
- ② コンピューターやDVDなどの機材が自由に使えない。
- ③ 学生は中等部3年まで続けて勉強したがっているが、2年生までのコースしかない。
- ④ 文化も教えたいが、時間が足りないので、教えられない。

以上から、教員が抱える中等教育日本語選択コースの問題点は、「学習者は学習項目がなかなか定着せず、教員は教える項目に自信がなく、準備をするための十分な時間が不足している。また選択科目に適した教材が不足しており、授業時間の確保や履修科目選択の方法など、学校の制度に不満を感じている教員もいる」ということが窺える。

2.1.5 新しい教材に求めるもの

教師が新しい教材に取り入れたい内容として挙げたものは、以下の3つである。①文字学習、②身近な話題の簡単な会話、③日本の文化に関する内容。また、学習者が楽しく、かつ集中して学べるよう、写真やイラストなどを豊富に使った見た目が明るいもの、さまざまな教具や素材、活動のアイデアなどがセットになったものを期待している。

2.2 学習者へのアンケート調査結果

(1) 日本語の文字を勉強しているか

- ①勉強していない。(33人)
- ②勉強している。(509人)

(2) 日本語の文字の学習が好きか

- ①好き。(512人)
- ②好きではない。(28人)

アンケートに答えた542人のうち90%以上が文字学習を経験しておりそのほとんどが日本語の文字は好きだと答えている。

(3) 今勉強しているコースで一番好きなこと(上位5位まで)

- ①簡単な会話(187人)
- ②文字(163人)
- ③日本文化・日本事情(67人)
- ④歌(46人)
- ⑤言葉(41人)

(4) 今後このコースでどのような勉強がしたいか

- ①日本文化・日本事情(276人)
- ②日本料理・お菓子の作り方(125人)
- ③簡単な会話(72人)
- ④日本の観光地(59人)
- ⑤漫画やアニメ(36人)

(3)と(4)の質問は、今まで勉強したこと(3)、まだ勉強していないこと(4)の中でどのようなことを学習したいかについて聞いたものである。したがって双方の上位5位をあわせることによって学習者が勉強したいと思っていることが見えてくると考えた。あわせた結果は以下ようになる。

- ① 日本文化・日本事情(343人)
- ② 簡単な会話(259人)
- ③ 文字(190人)
- ④ 日本料理・お菓子の作り方(125人)
- ⑤ 歌(76人)

選択科目で日本語を学んでいる学習者は、日本料理や日本の歌などを含めた日本の文化や習慣、簡単な日常会話及び文字について学びたいと考えていることが分かった。

2.3 調査結果の考察

若干重複するが、今回の調査結果から窺えることを以下にまとめる。

- ①選択科目としての日本語講座を教えている中等教育機関の日本語教員は、時間数の比較的小さい選択科目の日本語コースでも、口頭によるコミュニケーションを目標に挙げる人が多い。
- ②選択科目講座の学習期間は1年間から3年間まであって一通りではない。
- ③また、中等教育日本語選択コースの問題点として、「学習者は学習項目がなかなか定着せず、教員は教える項目に自信がなく、準備をするための十分な時間が不足している。また選択科目に適した教材が不足しており、授業時間の確保や履修科目選択の方法など、学校の制度に問題を感じている教員もいる」ということが指摘できる。
- ④教材の内容や形式に求めることについて、教師は「文字の学習」、「楽しくできる活動やタスク」、「日本の文化」を挙げており、また教材の形としては写真やイラストなどを豊富に使って見た目が明るいもの、さまざまな教具や素材がセットになったものを期待している。
- ⑤選択科目で日本語を学んでいる学習者は、日本料理や日本の歌などを含めた日本の文化や習慣、簡単な日常会話及び文字について学びたいと考えている。

3. 教材の内容及び構成

以上の調査から、選択コース用教材の内容は、①文字、②日常生活の簡単な会話、③日本文化・事情の3つの内容を取り扱うこととし、学習者が興味を持って取り組み、効果が上がるよう、様々な活動やゲームなども盛り込むことにした。この教材の構成は、1) ひらがな学習編、2) 場面会話及び日本文化・事情編の2編で構成され、1) のひらがな学習編は、『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』というタイトルで、2011年3月に出版された。2) の場面会話及び日本文化・事情編は、学校によって1年から3年と様々である学習期間に対応するため、各ユニット⁵⁾の内容を1回完結型とし、どのユニットを、どういう順番で学習するかを自由に選べるモジュール型の『こはるといっしょに にほんごわぁ〜い』として、現在開発中である。

なお、本稿では、上記1) のひらがな学習編『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』について報告する。

3.1 『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』開発の背景

先にも述べたが『あきこ』は毎日のように日本語を学ぶ、学習時間の多い学習者を対象に開発された教科書である。そのため、文字を学ぶ第1課についても、学習時間が少ない選択科目で学ぶ学習者にとっては、以下のような問題点があった。

- ①一度に導入する文字数が15文字で、多すぎる。
 - ②少ない学習時間を想定していないため、文字の形と音を覚えるための工夫が足りない。
 - ③定着のための聞く練習、読む練習の量が不足している。
 - ④学習時間が少ない学習者は、ひらがな習得に必要な期間が長いいため、学習途中で忘れてしまうことも多い。そのため、頻繁に復習することが必要となるが、『あきこ』にはそのための復習の素材の提供がない。
- 以上を考慮し、『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』の開発を開始した。

3.2 想定する学習者

中等教育の選択科目で日本語を学ぶ学習者を主な対象としているが、成人の学習者でも時間的に制約があったり、短期間でひらがな習得を目指す学習者も対象としている。

3.3 全体及び各単元の構成

『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』の全体の構成は、以下のとおりである。

1. 清音・濁音の導入・練習
2. 特殊音の導入・練習
3. 定着のためのゲームなど、教室活動の紹介
4. 自分でひらがな学習ができる、ウェブサイトの紹介
5. カタカナの紹介

また、全体の構成の特徴としては、

- ①濁音、半濁音はそれぞれの清音の後に配置した。
- ②あ〜さ行、た〜は行、ま〜わ行、それぞれのあとに、復習のための練習を数ページにわたって紹介し、既習文字の定着を促した。
- ③巻末にはアソシエーションのイラストとセットになった文字カードがあり、切り取って自分で練習ができるよう配慮した。

なお、本教材は1単元ごとに「あ行」「か行」などひらがなを1行ずつ導入・練習する構成となっている。各単元は1) アソシエーション法による文字の導入、2) 読む練習が数種類、3) 聞く練習が数種類、4) 書く練習が数種類、という構成であるが、その詳細は以下に述べる。

3.4 文字の定着を促すための工夫

選択コースで日本語を学ぶ学習者の問題として、文字の定着の悪さが挙げられた。そこで、文字の定着を促進するための対処として2つの方法を採用した。

(1) アソシエーション法

ひらがな46字それぞれに、音や字形、絵などによるイメージと、それに合わせたストーリーを作成し、短時間で文字を覚えられるよう工夫した記憶方法である「アソシエーション法」を用いた⁶⁾。タイ語のことばの中で、語頭にその文字に近い発音を持つものの絵(図1、図2参照)を描き、その絵の上にひらがなの文字を重ねて書く。例えば、「お腹いっぱい」を意味するタイ語は「イム」、「アリ」は「モツ」と発音する。このそれぞれのタイ語の音とひらがな、イメージを合わせると図1のようなになる。こうして音と字形をつなげることで、印象が深くなり、覚えやすくなると言われている。

JFBKKでは、2009年に、このアソシエーション法を用いた絵カード、『絵と音で楽しくおぼえようひらがなカード』を制作しており、『こはるといっしょに ひらがなわあ〜い』でもおなじイラストを使用している。

図1 アソシエーション法：「い」と「も」のイメージ及びタイ語のストーリー



図2 アソシエーション法を使ったひらがな「あ行」の導入ページ



(2) 復習や練習方法の工夫

梅田ほか（2008）では、韓国で連想法を使ったひらがな学習を行った結果、連想法による授業の方が、短時間でより多くの文字を記憶できるが、そのまま放置しておくで、保持率が下がることが示されている。また、2.4で述べたように、選択コースは授業時間数が少なく、定着が悪いことも問題点として挙げられている。このことから、学習が進む中で既習の文字を何度も目にし、復習の機会が提供できるよう、読む練習、聞く練習、書く練習などにスパイラルに出現させる工夫をした。また、学習者が飽きずにたくさん練習できるよう、クロスワードなどのゲームや歌、ひらがなが自習できるインターネットサイトの紹介なども豊富に取り入れた。以下、練習の例を挙げ、それぞれの目的と工夫について記す。

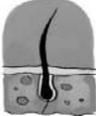
① 読む練習

図3のように、その単元で学習した文字と、これまでに学習した既習の文字を組み合わせたことばを各単元で10個程度紹介し、読む練習とした。一度学習したひらがなに次の単元以降も何度も出会うことで定着を図る試みである。また、日本語の発音、特にアクセントに不慣れなノンネイティブの教師に配慮し、すべてのことばにアクセント記号をつけた。

図3 読む練習例

CD1 10 次のことばを読みましょう

1. อ่านคำศัพท์ต่อไปนี้

			
か 蝇	สีดำ สดง	ต้นไม้	สถานี
			
มือ	ดอกเบญจมาศ	เข ชน	
			
บ่อ	ปลาการ์ตูน	โกะ	

②聞く練習

音と文字とをしっかりと結びつけるため、付属CDで聞き取った音に○をつけたり、巻末のひらがなカードを使い、聞き取った音を選んで、順番に並べるといった、聞き取り練習を充実させた。(図4、図5参照)

図4 聞く練習例1

CD1 6 聞き取った音に○をつけましょう。

2. ฟังแล้ววงกลมตัวอักษรที่ถูกต้อง

1) 	2) 	3) 
4) 	5) 	

図5 聞く練習例2

CD1 8 正しい方に○をつけましょう。

3. ฟังแล้ววงกลมคำที่ถูกต้อง

- あい あお
- え うえ
- え いえ
- お あお
- いえ うえ

巻末カードを使って、聞き取った音の順番に並べましょう。

4. ฟังแล้วเลือกบัตรอักษรเรียงนะที่ได้ยิน

あ	い	う	お
か	き	く	え
け	こ	さ	し



③書く練習

書く練習は、音と文字をつなげることを意識して作成した。図6の練習では、まずひらがなを読み、その下の下線にその音をローマ字で書くことで、音に意識を向ける。次の練習(図7)では、ローマ字を読み、その音に合うひらがなを書く。また、上述②の、音を聞いてカードを並べ替える練習の発展練習として、聞いた音をひらがなで書くディクテーションを行うこともできる。

図6 書く練習例1

ひらがなの下にローマ字を書いてから、ひらがなを書きましょう

6. เขียนเสียงอ่านเป็นอักษรโรมานลงในช่องว่างใต้อักษรสระนะ แล้วคิดคำศัพท์ต่อไปนี้

	あい	<input type="text"/>					
	—	<input type="text"/>					
	いえ	<input type="text"/>					
	—	<input type="text"/>					
	うえ	<input type="text"/>					
	—	<input type="text"/>					
	え	<input type="text"/>					
	—	<input type="text"/>					
	あお	<input type="text"/>					
	—	<input type="text"/>					

図7 書く練習例2

ローマ字で書いてある音をひらがなにしましょう

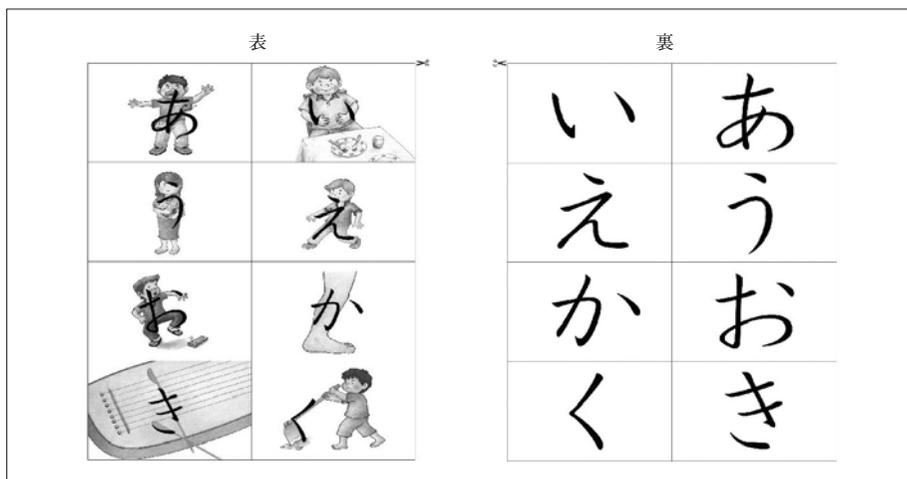
7. เขียนคำศัพท์ต่อไปนี้จากอักษรโรมานที่กำหนด

1) <input type="text"/> <input type="text"/> a i	2) <input type="text"/> <input type="text"/> a o	3) <input type="text"/> <input type="text"/> u e
4) <input type="text"/> <input type="text"/> i e	5) <input type="text"/> e	

(1) 巻末ひらがなカード

巻末に、表面にアソシエーションのイラスト、裏面にひらがなが書いてあるカードのセットをつけた。1文字ずつ切り取り、学習者が自分で裏返しながらかみ方を練習できるようになっている。少しでも楽しい気分で学習できるよう、カラーで印刷した。

図9 巻末ひらがなカード



(2) 日本語学習ウェブサイト紹介

タイでは、インターネット環境も整いつつあり、高校生もよく使用することから、一人でひらがなが勉強できる日本語学習ウェブサイト紹介のコーナーを設けた。

図10 インターネットのひらがな自習サイトの紹介例



4. おわりに

2011年3月の出版以降、実際にこの教材を使って授業をした教師からは、以下のような感想が寄せられた。

- ・ アソシエーションカードは、学習者が楽に、且つ速く文字を覚えるのを助けていた。
- ・ 「読む練習」にアクセント記号がついているのはよい。教師も学習者も、自信を持って正しく発音できる。
- ・ 従来のテキストは聞く練習が少なかったが、このテキストでは音と文字が結びつけられる。また、正しい発音のインプットが多いため、学習者の発音にいい影響が見られた。
- ・ 書く練習では、音を意識しながら練習できるところがよかった。また、様々な形式があるので学習者が飽きず、さらに何度も練習するので、定着がよい。
- ・ 様々なゲームがあることで、ひらがな学習が楽しくなり、モチベーションを保つことができた。

全体的に肯定的な感想が多いが、今後、アンケート調査などで、この教材に対する教師や学習者の意見をまとめてみたいと思う。

また現在、文字カード、アソシエーション法を用いた教室活動のアイデア、学習者用の自習コーナーなどを提供する、テキストと連動したウェブサイト「koharutoiss honi.com」も、2012年3月の公開を目指して開発中である。一方で、『こはるといっしょに にほんごわあ〜い』は現在協力校で試用中であるが、その開発プロセスについては、稿を改めて報告したい。

〔注〕

⁽¹⁾ 国際交流基金 (2011) 『日本語教育機関調査・2009年 海外の日本語教育の現状』

⁽²⁾ Prapa SANGTHONGSUK、三浦 多佳史、渋谷 実希 (2010) 「中等教育機関の日本語選択コース教材作成にあたっての調査結果報告」国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要、第7号にタイ語での報告が掲載されている。

⁽³⁾ タイの中等教育は、主に6年間の一貫教育で行われており、本稿では、日本の中等学校にあたる3年間を「中等部」、高等学校にあたる3年間を「高等部」と呼ぶこととする。

⁽⁴⁾ 『仏暦2551年基礎教育カリキュラムに沿った外国語学習ガイドライン』(次ページ参考文献参照、国際交流基金バンコク日本文化センター訳)

⁽⁵⁾ 『こはるといっしょに にほんごわあ〜い』では、学習単元として「課」ではなく「ユニット」を採用している。タイ語の「課」に当たることばがはじめから順番に学習する形を連想させるため、モジュール式の当教材の趣旨に合わず、かわりに「ユニット」を使った。

⁽⁶⁾ Quackenbush (1999) では、「IS 連想法」(Image と Story を使う連想法) として、主に英語母語話者を対象にした開発や研究が行われている。

タイ国中等教育機関の日本語選択コース用ひらがな教材開発報告

〔参考文献〕

梅田康子、水田澄子、鈴木庸子（2008）「韓国人高校生のための IS 連想法ひらがな学習カードの開発—記憶方略および ARCS 動機付けモデルからの評価—」日本語教育学会世界大会、於釜山外国語大学 発表資料

梅田康子、水田澄子、鈴木庸子（2009）「韓国人高校生のための IS 連想法ひらがな学習カードの評価—記憶方略および ARCS 動機付けモデルの観点から—」『愛知大学言語と文化』、NO. 20

Quackenbush H, C. (1999) *HIRAGANA/KATAKANA in 48 minutes: teacher guide*. Curriculum Corporation, Melbourne, Vic. Australia.

กรมวิชาการ กระทรวงศึกษาธิการ(2544,หน้า2)หลักสูตรการศึกษาขั้นพื้นฐาน พุทธศักราช ๒๕๔๔
กระทรวงศึกษาธิการ

สำนักวิชาการและมาตรฐานการศึกษา สำนักงานคณะกรรมการการศึกษาขั้นพื้นฐาน กระทรวงศึกษาธิการ(2552,หน้า
1) ตัวชี้วัดและสาระการเรียนรู้แกนกลาง กลุ่มสาระการเรียนรู้ภาษาต่างประเทศ ตามหลักสูตรแกนกลาง
การศึกษาขั้นพื้นฐาน พุทธศักราช ๒๕๕๑ กระทรวงศึกษาธิการ